
夏ホラー2009今年も性懲りもなくあれこれ

ミラージュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏ホラー2009今年も性懲りもなくあれこれ

【Nコード】

N6786H

【作者名】

ミラージュ

【あらすじ】

何だかんだ言って今年も書きちゃいました。短編集っていうか内容はほとんど支離滅裂な戯言独り言です。冷やかし程度に読んで戴ければ感謝感激雨霞にございます。人気投票なんていらねえよ、夏。

『恐怖』の病氣（前書き）

先に言い訳させて下さい。

いやね、実は最初は参加するつもりなかったんですよ、夏ホラー。

だって去年、嫌ってほどホラー小説を創作する才能が無い、って思い知らされましたもんでね。

でも、初のならう主催の正式企画だし、他の参加作家様方々にも以前別の企画で一緒だった人もいらっやっだし、さらに忙しかったはずの仕事も急遽転職する事になり時間が出来たもんで……。

なかなか連載中の作品の方の執筆にかかる気にもならないので、気分転換でちょっとだけ書いてみようかなあ、ってついつい。

だから、酷い出来です。

ろくすっぽ推敲もしてません。

内容はほとんどないよう。

なんちゃって。

そんな事ですから人気投票も辞退しております。

とにかく、暇だったら夜長の読書で疲れた頭をリフレッシュする為の気晴らし程度で覗いて戴けると光栄です。

ミラージュのなんちゃってホラー、はじまりはじまり。

『恐怖』の病氣

今から一年前のこんなジメジメとした梅雨の曇り空、私は世界で一番大好きで親友のようだった母を亡くしました。

あまりに突然でした。まだ四十一歳の若さでした。小さい頃から一人娘の私の事をとても大切に可愛がってくれて、普段の家事はおろかスーパーマーケットでのパートタイマーの仕事も笑顔でこなす、明るくて元気で近所でも好評判の自慢の母でした。

当時まだ高校三年生で大学受験を控えていた私は、毎日の忙しい受験勉強の日々に追われながらも、『もし志望大学に合格したら、お祝い代わりに影ながら私達家族の為に頑張ってくれている母を誘って海外旅行に行こう』と、私なりの親孝行プランを考えていました。受験勉強前にやっていたコンビニのアルバイトで貯めた二人分の旅行資金。あくまでも目的は私の合格祝いの旅行ですから、母にはその時まで内緒にして合格の報告と共にチケットをプレゼントして驚かす予定でした。私のプランに父も喜んで協力してくれて、その日の事を思うとどんな厳しい勉強にも耐えられました。

その結果、私は無事に大学に合格する事が出来ました。しかし、その時すでに母はこの世から旅立ってしまった後でした。合格の報告も、親孝行も兼ねた二人での海外旅行もプレゼントする事が出来ませんでした。私の合格通知とそのチケットは今、母の遺骨と共にこのお墓の中で静かに眠っています。

誰もが予想していませんでした。まさかあのアクシデントが、まさ

かあの傷が、大切な母を命を奪い去ってしまうだなんて、私達家族も近所の人達も想像すらしていませんでした。

甘かったのです。私は今も後悔しています。もし私が、もう少し様々な病気の知識を身につけていたら、傷の見た目だけで判断せずにすぐ病院へ連れて行ってあげてたら、もしかすると母は死なずに済んだかもしれない、あんなに苦しまずに済んだかもしれないと……。

「……お母さん！？ どうしたのその手の傷！？」

一年前の夏休み、図書館で一通り勉強を済ませてきた私が家に帰ると、リビングにはまだ鮮血が滲むガーゼと包帯を使って自分で傷の処置をしている母の姿がありました。私は一瞬、料理中に誤って刃物で切ってしまったのか、とも思いましたが、母から帰ってきた答えはそんな心配を白けさせるような呆れたものでした。

「……いや、あのね、ごめんね理香、驚かしちゃってね？ 違うのこれ、母が調子ノリすぎちゃったのよ、ついつい可愛いからって向こうが怯えてるのも気にしないで容易に手を出したからいけないの」

母は大の動物好きで、特に犬を見ると鳴き叫ぶ小型犬だろうと自分より大きい大型犬だろうと喜んで近寄りスキンシップを取る人でした。明らかに犬の方が怖がって牙を剥き出し警戒していても、まるでムツゴロウさんのように根気よく接して、最後には犬の方が参っ

ていつしか仲良くなっちゃう不思議な力を持っていました。

母は子供の頃から常に犬と一緒に生活する事に慣れていて、とても犬の扱い方に自信があったみたいです。本当は家でも犬を飼いたかったのですが、父が犬アレルギーの症状を、私が小さい頃に軽度のアトピー症状を持っていたので断念せざる負えなかったそうです。その為、その代わりとばかりに近所の家で飼われている犬は片っ端から母によって手懐けられて、いつしか近所の愛犬家達の間で知らない人はいないと言われるほどの有名人となっていました。『犬おばさん』なんて言うあだ名までつけられてしまったほんです。

「この前の日曜日、三丁目の新築の家に若いご夫妻がお引越してきましたじゃない？ あそこでね、まだ子供でスゴく可愛い柴犬のワンちゃんが飼われてるって近所の人が教えてくれたの！ 母それ聞いてもういてもたってもいられなくなっちゃって、お引越しのご挨拶がてらちょっとその子に会いに行ってきたのよ」

柴犬は母がまだ父と結婚する前、自宅に住んでいた時に最後に飼っていた犬種でした。その為が一番思い入れが強く大好きな犬種で、柴犬の姿を見ると明らかに他の犬種より嬉しそうな様子で飛んでいってしまう母の姿を良く覚えています。今回も多分そんな感じだったでしょう。でも、違ったのはその柴犬が飼われていた若夫婦の家の環境でした。

「……でも、その子ね、最近は中型犬でも室内で飼われて綺麗にして貰っているのに、あの若い夫婦間での約束事なのかしら、外にある汚い小屋に鎖で繋がれて、側にあったアルミのお皿には水一滴すら入ってなくて放ったらかしにされてたわ、母それ見て可哀想にな

「っちゃって、いけないとは思いますがスーパーで牛乳とパンを買ってきちゃったのよね」

「えっー！？ ダメだよお母さん！ 余所の家の犬の飼い方に余計な茶々いれたらいけない、って私達にいつも言ってるのはお母さんじゃない！？ そんな事してその家の人は怒らなかったの？ ヤダよ私、こんな事で変な近所トラブルとかになったりしたら！？」

「うん、それは大丈夫よ、だってお家の人留守だったもん、でね、お皿に牛乳注いであげたらその子、スゴい勢いでペロペロ飲みだしたのよ！ 余程喉が渴いていたんだと思うわ、それでね、多分ご飯もまともに食べていないんじゃないかと思って、母買ってきたパンを千切ってあげてその子に食べさせてあげようと手を出したのよ」

その時でした。余程腹も空かせていたと思いき子供の柴犬は、勢いで余ってパンと一緒に母の右手の親指と人差し指の間の手のひらにまで噛みついてしまったらしいのです。牙はかなり深くまで突き刺さり、傷口からは血が滴り落ちるほど出血したそうです。弘法も筆の誤り、猿も木から落ちるとは正にこの事。母らしくもない、極めて軽率なミスでした。

「……多分あの子、人から物を貰う時のしつけをして貰ったりとか人から撫でて貰ったり可愛がって貰ったりした経験がほとんど無いのかもしれないわね、お腹が空きすぎて必死だったのよ、だから加減無く母の手まで噛んじゃったんだと思うわ、あの子に罪は無い、罪があるとすればその飼い主であるあの家の若夫婦よね」

「……それはいいけど、肝心のお母さんのその傷は大丈夫なの！？

傷、かなり深いんでしょ？ 念の為病院行く？ 自分で処置するだけじゃなくて消毒くらいはした方が良いと思うよ？」

「何を言ってるのよあなたは、私を誰だと思ってるの？ この近所で知る人ぞ知る『犬おばさん』よ？ これまでの人生で何度犬に噛まれてきたとお思いかしら？ 所詮は子供の犬が噛んだ程度、これくらいの傷なら家事にも仕事にも影響無いし、一週間もすれば傷口も塞がるわよ」

「……でもその犬、お世辞にもあまり清潔には飼われていなさそうなんですよ？ バイ菌とか傷口から入ったら炎症起こしたりしないかな？ ねえお母さん、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫、さつきさつと軽く水で傷口も洗ってるし、それに、ワンちゃんをそんな病原菌みたいな目で見たらダメよ？ さつきも行った通り、悪いのはワンちゃん達じゃない、全ては飼い主に責任があるの、飼い主が然るべき対応をしてあげないと、飼われるワンちゃん達は幸せに暮らす事が出来ないのよ、あの子もそう、ちゃんとお水とご飯をあげていれば、母の手を噛まなくたって澄んだはずなんだから」

「……でもお母さん、そろそろ人の家の犬にまで構ったりするのやめたら？ この近所の人達はみんな犬好きで付き合っても長いから良いけど、最近は近所付き合いどころか一般常識が薄い人達もたくさんいるみたいだし……」

「だったら、あなたは人の心配してる暇あるなら自分がそういう人間にならないように注意なさい！ 動物の飼い方の常識を知らないなら、それを教えてあげるのが母の役目よ！ 今度あそこの夫婦に会ったら、ガツンと一言忠告してあげないといけないわね！」

「……本当に、トラブルだけはやめてよ、お母さん！」

その日一日、母は自分で言った通り午後からの仕事も帰ってきてからの家事も難なくこなし、いつもの元気そのものの姿でした。夕方頃には傷口からの出血も止まり、患部が極端に腫れる事も無く異常は見られませんでした。

しかし、それが命取りになったのです。噛まれてすぐに何かしらの異常が見られれば、私は即座に母を病院に連れて行き正しい対応をして貰っていたでしょう。私も母も、これまでの浅い人生経験と知識だけで事の重大さを見誤り、気づいた時にはもう手の施しようの無い状態まで許してしまったのです。

「……うわぁ、ヒドい雨……」

それから一ヶ月後の夏休み最終日、私が目を覚ますと外はバケツをひっくり返したような大雨が降っていました。時計を見るともう午前十時、いくらまだ夏休みとはいえ明日からは学校、完全に寝坊です。この時間では父はもちろん、母も仕事に出ていつてしまっている頃。『自分の朝ご飯、まだあるかな？ この雨でコンビニ行くの嫌だなあ』なんて事を考えて、私は眠い目を擦りながら二階の自分の部屋から一階へと降りてリビングの扉を開けました。すると……。

「………うわっ！ 何、この部屋！？」

いつもならば曇り空でも窓が東向きなので午前中は灯りを点けなくても十分明るいはずの我が家のリビング。しかし、窓は厚手のカーテンどころかどうやら雨戸まで閉めてあるみたいで真っ暗闇でした。それより異常だったのは室内の温度。いくら天候が悪いとはいえ七月の夏真っ盛り、外の気温ですら軽く二十五度を超えていたというのに、その時のリビングはまるでサウナのように汗が滲み出てくるほど蒸し暑く、普通に呼吸をする事すら困難なくらいでした。

「何なのこれ……？ 誰かいるの！？」

驚いた私がほとんど利かない視界の中で手探りをしながら部屋の灯りのスイッチを入れると、そこには冬のシーズン終了に合わせて物置に片付けたはずのストーブが三台も稼働していて、室内付けのエアコンからも吐き気がするほどの温風が吹き出していました。

そして、部屋の中央に置かれたソファーの上には、糞虫が冬眠する時の蛹のように何枚もの布団を重ね合わせてくるまっている人型のシルエツトが寝そべっていました。頭から足の先までスッポリとその体を包み込み、中で微かに震えているような動きも確認する事が出来ました。

「……まさか、お母さん？ お母さんなの！？」

父にしては体が小柄、ならばあと、家族でこの家にとすれば母以外に考えられない。そう直感した私はこの異常な光景に恐怖する余裕もなく母の元へ駆け寄り、どうしていいかわからないまま必死

で母に呼び掛けました。

「……り、か？ 理香……」

「お母さん！？ 一体どうしたの、これ！？ 仕事に行ってたんじやなかったの！？ 何なのこの部屋の暑さは！？ ストーブとか、布団とか、雨戸閉めたのも、これってお母さんが一人でやったの！？」

「……理香、助けて！ 寒い、寒いの……！」

布団の隙間から見えた母の顔は、いつもの元気な表情からは想像もつかないほど色白く血が引いていて、目の下にはペンで塗り潰したような真っ黒な隈が浮き出ていました。まるで死期が近づいている末期の難病患者のような変わり様に私は驚きを隠せず、何が起こったのか、どうしたらいいのかわからず頭の中が完全にパニック状態に陥ってしまいました。

「……お母さん！？ どうしたの！？ 何があつたの！？ どうして、どうしてこんな事に……！？」

「……救急車、救急車呼んで、お願い……！」

母に言われ急いで119番通報をした私は救急車が来るまでの間、別の部屋からさらに布団を持ち出して母に被せたり、しっかり温風が当たるようにストーブの位置を動かしたりと色々と出来るだけの

看病をしようと試みましたが、一向に母の体の震えは止まりません。それどころか、次第に意識も薄れてきているみたいで話す言葉も徐々に少なくなり、『このまま意識を失ったらいけない』と直感で思った私は必死に母に声をかけ続けました。母の体に一体何が起きているのかわからなかった私には、これが精一杯の看病だったのです。

「……お母さん、まだ寒い？ もっとストーブの風、強くする？」

「……嫌、嫌、風、怖い、風の音、怖い……！」

「……怖い？ でも寒いはずなのにお母さん、凄い汗……！」

母の額からは滝のように汗が滴り落ち、布団の中に手を入れてみると着ているシャツが水を被ったみたいにびっしょりと湿っていました。これでは脱水症状を起こしてしまうと思った私は急いでキッチンへと駆け込みコップに一杯のぬるめの水を汲んで、再び母の元へと駆け寄りました。

「……お母さん、寒いかもしれないけど、このままじゃ脱水しちゃうから水分補給しよう？ ほら、ちょっと体起こして、私がゆっくり飲ませてあげるから……」

私の声に反応した母は苦しそうながらもゆっくりと起き上がり、私がついていたコップに震える手を伸ばしてきました。しかし……。

「……嫌、嫌あああああ！！！！！！」

次の瞬間、母は今まで見せた事の無い引きつった形相でそのコップを振り払うと、突然くるまっていた布団から外に飛び出し、リビングの隅へと四つん這いになって逃げ出したのです。その姿にもういつもの母の面影はありませんでした。まるで、捕食される事を拒み逃げ回る小動物のような……。

「何するのお母さん！？ 一体どうしちゃったよ！？ 私、何が何だか全然わかんないよ！？」

「嫌、嫌、嫌嫌嫌嫌嫌あ！！ 怖い、怖い！ 水を近づけないで！ 水が怖い！ 嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だあ！！」

「お母さん、お願いだから落ち着いて！ 水とか風が怖いって、お母さんおかしいよ！ もうすぐ救急車来るから、お願いだから落ち着いてよ！？」

「嫌あ、寒い、痛い、怖い！！ 理香、助けて！ 誰か助けて！ 嫌あああああ！！！！！！」

「お母さん！！」

母にはもう私の声も聞こえなくなっていたのか、私の必死の制止も振り切り何を言っているのか聞き取れない奇声をあげながら発狂し

たように床にのた打ち回って、救急車が到着した時にはすでに意識を失ってしまっていました。病院に運び込まれ入院している間も一度も意識は回復する事は無く、母は一週間後眠るように天国へと…。

「……………どうして、どうしてこんな事に……………」

私は未だに、母の墓前に立つと自然に涙が零れてきて止まりません。当時母を担当したお医者さんの話だと、母の死因は脳のウイルス性炎症による呼吸不全だったそうです。その話を初めて聞いた時、私は母が犬に噛まれたあの傷口を清潔にしなかった為に運悪く何かしらのウイルスに感染したのだろうと思っていました。

しかし、病院側の解剖検査やそれに併せて調査を依頼された市の保健所の資料により、私達遺族はとんでもない事実を知らされる事になったのです。まさかこのご時世に、この日本でそんな病気がまだ存在していたなんて、夢にも思っていませんでした……。

現在、あの移住してきたばかりの若夫婦はとうの昔に再び別の町へと引越し、そこで飼われていたワンちゃんも処分されもうこの世にはいません。私は彼らを恨んではいません。夫婦にも両働きをしていたという多忙な理由もあり、ワンちゃんに至っては決して悪気など無かったはずです。それに、母にも余計な手出しをした落ち度があった訳ですから。

でも、まだ怖いんです。友達の家で飼っているワンちゃんを紹介さ

れても、私は絶対に触れる事が出来ません。人に懐いている野良猫も同様です。彼らのあの可愛い瞳の奥に潜む恐ろしい『悪魔』と、あの日の苦しみの方打ち回る母の姿をどうしても忘れる事が出来ないのです……。

……以上、あくまで『ホラー小説』企画なのでノンフィクション風なお話を先に置かせて戴きました。もちろん、このお話は私ミラージユにより創作された完全なフィクションです。過去にこのような事実、事故はございませんのでご安心下さい。

それでは、ここからは私がこのお話で読者の皆様に伝えたかった『恐怖』の本題に移らせて戴きます。去年の夏ホラー企画で投稿させて戴いた作品、『白い糸くず』とはほぼ同じような進行と思って戴ければ幸いにございます。

さて、早速ですが皆様、『この世界で最も発病すると死に至る確率が高い病気』とは、一体何だと思えますか？

不治の病として世界中で有名で、手術により摘出して何度でも再発する可能性のある『癌』でしょうか？

いや、人類が子孫を残す為に避ける事の出来ない性行為で感染し、未だに特效薬開発の目処が立たない『AIDS』でしょうか？

それとも、最近新型ウイルスが世界中で猛威を振るい、感染力においては最強と言われている『インフルエンザ』でしょうか？

あるいは『コレラ』？ 『ペスト菌』？ 『テング熱』？ 『天然痘』？ 感染症とか限りません、『心筋梗塞』？ 『脳梗塞』？

『糖尿病』？ それとも最近流行している精神を病み自殺行為に陥る『鬱病』でしょうか？

いいえ、どれも違います。これらの病気は完治する可能性やその治療法、進行を遅らせる方法などが医学研究により存在し、発病した全ての人間、生物が死に至る訳ではありません。確かに致死率が高い病気ばかりですが、発病した後も生還を果たした患者例は数多く記録されています。

ならば、その病気とは一体何か？ それはあのギネスブックにも『最も致死率が高く生存率が低い病気』として登録されている意外な病名。確たる治療法が無く、発病したら死を待つしかない恐怖の感染症病気。

その病名とは、『狂犬病』。

「ハア？ 狂犬病？ それって犬だけがかかる病気じゃねえの？」

「最近狂犬病にかかった人なんて聞いた事無いよ？ 第一、狂犬病なんて今のこのご時世にまだ存在してる病気なの？」

皆様も名前だけなら一度は聞いた事があるであろう狂犬病、これ実は哺乳類なら誰もが感染する可能性のある、ラブドウイルス科リッサウイルスに属する狂犬病ウイルスを病原体とする人獣共通感染症なのである。

人への感染の経路は一般には捕食などですでに感染した動物の咬み

傷などから唾液と共にウイルスが伝染する場合が多く、場合によっては傷口や目・唇など粘膜部を舌により舐められた場合も感染する可能性が高い。一見コミュニケーションの一つと思える飼い犬とのキスも、実はかなり危険な行為と言える。

そして、狂犬病ウイルスは先程の説明の通り人を含む全ての哺乳類に感染する為、その感染経路は犬だけではなくもちろん猫や動物園でお馴染みの猿、馬、鹿、ヤギ、リス、イタチ、キツネ、アライグマ、レッサーパンダ、コウモリなどからも感染する。通常、ヒトからヒトへの感染は無いそうだが、角膜移植や臓器移植によるへの感染例が存在しているそう。

肝心の感染から発病に至るプロセスとは、体内に侵入したウイルスは神経系を介して脳神経組織に到達し、その後脳内に炎症を引き起こす事により発病する。その速さは日に数ミリから数十ミリと他のウイルス性感染症と比べると潜伏期間が若干長く、したがって発病までの期間は咬傷の部位によってかなり違いがある。その期間は早くて二週間、大体一ヶ月と言われている。

そして、一番恐ろしいその症状。発病後の初期は風邪に似た悪寒症状のほか、咬傷部位に痒み、熱感などがみられる。急性期には強烈な不安感と興奮性、麻痺、精神錯乱、恐水症状、恐風症などの神経症状が現れる。

恐水症状とは水などの液体を飲み込む際に嚥下筋が痙攣し強い痛みを感じる為、それにより水を極端に恐れるようになる症状で、恐風症とは風の動きに恐怖感を抱き過敏に反応してそれを避けるような仕草をする症状である。

また、日光にも過敏に反応しこれを避けるようになる為、瞳孔反射にも異常が見られるようになり、腱反射などにも異常を来す。それらの症状から2〜7日後の末期には脳神経や全身の筋肉が麻痺を起こし昏睡状態となり、最後には呼吸障害によって死亡する。

また、発症後の生存率は極めてゼロに近く、つまり死亡率はほぼ百パーセントである。そして、この病気が認知されてから今現在に至るまでも有効な治療法は存在してなく、世界はおるかまだ現在の様な衛生事情が確立されてなかった頃の日本でも数々の感染者と死者を出した、正にギネスブックのワールドレコードホルダーとして相応しい『恐怖』の病気なのである。

しかし、確かに最近『狂犬病』というこの病名が世間でほとんど聞かれなくなったのは間違いない事実。それはなぜ？ これだけの致死率の高い感染症が癌やAIDSやインフルエンザなどの病気と比べると、あまりその恐ろしさや詳しい情報が認知されていない。それはなぜ？

その理由の一つ、狂犬病とは発病してしまうとすでに手遅れになってしまう病気だが、発病・感染を『予防』する事に関しては完全なマニュアルが随分昔から日本でも世界でも存在しており、未然に防ぐ事が容易い病気でもあるのだ。

その予防法の一つが狂犬病ウイルスに対するワクチン接種。犬などのペットや家畜等の動物は狂犬病予防法や家畜感染症予防法などの法律によりワクチン接種が義務づけられている。犬などのペットを飼った事がある人なら保健所に赴いた経験もあつたりしてご存知だろう。これにより狂犬病感染ルートはほぼ壊滅する事が可能となった。

また、戦後からの衛生面強化の一環として行われたワクチン未接種の野犬駆除や発病した家畜の駆除義務、各役所へのペット飼育登録により管理され日本では1956年以来、発病例は一つも報告されていない。しかし、まだ世界中では日本の様な徹底的な対応策がされていない国もあり、残念ながら渡航中に感染し死亡した日本人患

者が三例ほど記録されている。

ちなみにワクチン接種は体内へのウイルス感染予防だけでなく、最悪ウイルスの侵入を許してしまった場合の最後の希望としても使用される。狂犬病とはウイルスの最終到達地である脳内に侵入した時に発病する病気、その進行速度は前文で説明した通り二週間から一ヶ月の間。その期間にワクチンを接種すれば発病・死亡を免れる事が可能なのだ。

狂犬病の致死率は『ほぼ』百パーセントであり、ウイルスに感染した人間全てが死に至った訳ではない。現在記録に残っている生存者は六人。その内の五人は発病前にワクチン接種を受けていた。ウイルスが脳内に到達する前にワクチンにより予防する事が出来た、数少ない生還例である。

しかし、それでも助かったのはこれまでの歴史と世界中で僅か六人のみ。残り一人に関しては現在も理由が解明されていないそうだ。この記録だけでもどれだけこの病気が恐ろしいものなのかおわかり戴けるだろう。しかし、正しい予防法と注意さえすれば未然に防げる病気。すでに猛威を振るう事の無い過去の病気と言っても過言ではないのかもしれない。

「何だ、ならもう怖がらなくてもいい話なんじゃねえか、ちよつと前に飼い犬に噛まれた事があったからビクビクしたぜ」

「法律でワクチン接種が義務づけられているんだつたら、別に人に飼われている犬や猫に触ったって大丈夫なんですよ？ そんな衛生面の悪い国に旅行する予定も無いし、それなら感染する可能性なんて絶対無いじゃん？」

確かに、現在の日本では普通に生活していればまず感染する事が考えにくい狂犬病。しかし、果たしてその可能性がゼロなのか？　と言えは筆者個人の意見とすればそうとは思えないのだ。その理由とは大まかにまとめてざつと二つ。そして、その要因とは自然現状や動物達によるものでもなく、我々人間自らによるもの。

まず一つは、近年のペットブームによる外来動物の輸入によるウイルスの国内侵入。

外種犬に限らず狂犬病に感染している、あるいはウイルスを潜伏させている動物がペットとして海外から日本へ持ち込まれる危険性は十二分にある。輸入国である日本が狂犬病対策に対して万全であったとしても、その輸出国が万全な対策を施しているかどうかは保証されていないのが実際のところ。

特に最近は一風変わった多種多様な動物をペットとして飼う事が流行し、しかもそこに現在の狂犬病予防法では犬以外のペットに対するワクチン接種が義務化されていないという驚くべき事実もあり、完璧な国内へのウイルス侵入窓際防止対策が出来ていない問題点が存在しているのだ。

つまり、ペットショップやインターネット等で購入された犬以外の動物がウイルスを体内に潜伏させていて、それが日本の地で狂犬病を蔓延させてしまう話も有り得るという事。実際他国ではペットとして輸入されたハムスターが国内で大量の感染者を生み出した記録も残されている。

二つ目の理由は、それら哺乳類をペットや家畜として所有する個人や団体など、我々人間達のモラルの低下。

義務であるはずのワクチン接種やそもそも人に対して害を与えないように躡る事を怠るはもちろん、『飽きた』、『飼う事が出来なくなった』、『新しいのを買ったからもういらない』などという呆れた理由によりペット等を捨てる人間達が後を絶たない現実。

金銭的での理由によりワクチン接種を拒否する犬屋敷の住民や悪徳ブリーダー、資金繰りが上手くいかず動物と共に観覧施設ごと放棄し姿を眩ます企業責任者などの話題も最近良く耳にする話だ。

これらは全て人間達のエゴ、あまりに勝手極まりない無責任な行動。酷い話ではワクチン接種が義務づけられている事すら知らなかった飼い主もいたくらいだ。

狂犬病の恐怖は、決してすでに去ったものではないのだ。

感染が疑われる全ての輸入外来動物に対して公的な調査体制が整っていない事が日本国内へのウイルス侵入の危険性に拍車をかけているのは確かに事実だが、狂犬病予防法改正などの行政の問題は我々一般市民が今すぐどうこう出来る話ではないだろう。

それより前に、我々人間が動物と接する事に対し知識を蓄え理解を深め、各自一人一人が病気を未然に防ごうと思う心構えがこの『恐怖』に対抗出来る一番の方法だと言えよう。かく言う筆者も四匹の犬を飼っているが、ワクチン接種や躡はもちろん容易に手を出す人には簡単に犬を近づけないよう心掛けている。

単純に可愛がる事だけがペットに対する愛情ではない。狂犬病に感

染させない対応、そして自分自身や他の人達が感染しない対応をしてこそ本当の愛情だと自分は思う。全ては我々人間次第、彼らにはこの『恐怖』から身を守る術が何も無いのだから。

あなたの家で飼われているペットは、ちゃんとワクチン接種を済ませていますか？ 餌を与えようとして迂闊に手を出したりしていませんか？ そして何より、最近動物に噛まれた経験はありませんか……？

『恐怖』と疑問

と、まあ一作品書いたところで去年の夏ホラー企画からずっと頭の中に蓄積されているある疑問。

そもそも『恐怖』っていう感情は一体何なのさ？

人類などの哺乳類を始めとする、ある一定の知能を司る生物が表現する事が出来る情報伝達方法、『感情』。その中でも『喜怒哀楽』という四つの感情は、生まれながらにして身についているものだと言われている。

しかし、その『喜怒哀楽』の中に『怖』の感情は入っていない。

生まれたばかりの人間の赤ん坊の反応なんかを見ると良くわかる。目に写る興味の深いものに対して笑ったり、空腹や寂しさなどで自分の欲求が満たされない時には不快を感じ泣き出しする。

しかし、何かに怯えたり怖がったりする感情を見せるようになるのは、脳細胞が成長し感情がより豊かに表現されるようになるまでしばらく先の事。

そのくせ、『恐怖』という感情は何も人間などの高等生物に限った事ではなく、比較的感情表現に乏しい鳥類や爬虫類、植物までもが備わっていると言われており、それにより怯える、竦む、逃げ出すなどの行動反応を起こしたりする。

『恐怖』って何？

なぜ、生きとし生けるものは『恐怖心』という一見不快感の塊のような感情を備え持つようになったのか？　そして、何に対して、何がきっかけでその様な感情が芽生えたりするようになるのか？

と、言うより、人間は一体何に対して最大の恐怖心を抱いたりするのだろうか？

それがわかればホラー小説を書くのは極めて簡単。何せ一番怖がるネタで小説を書けば自然とその作品が一番怖い作品となり、大賞に選ばれる事間違いなしだからだ。

そんでもってその作品をドラマなり映画なりで映像化すればその内容の怖さにたちまち評判になって大ヒット間違いなし。最恐のホラーになるのは当然の事だろう。

だが、一体何が恐怖心を煽りたてるかは人、場面、展開によって非常に曖昧。人間が基本恐怖を感じるものをカテゴリー分けしても、オカルト、心霊、サスペンス、グロテスク、スプラッターと色々ござれた。

『饅頭こわい』なんて話もある。

『地震、雷、火事、オヤジ』なんてのもある。

『恐怖』って何？

そんな事を考えて詰めていったらとても小説なんぞ書けなくなってしまうた。

なーのーでー、

ここから先は『恐怖』という感情がどこから来るのか、何に対して『恐怖』を感じるのか、そして全ての生物が一番『恐怖』を感じるものが何なのか、私筆者なりの行き着いた答えを無造作に書き並べていこうかと思っております。

どうせ誰も筆者のようなヘタレ適当コメディ作家に身の毛のよだつような絶品ホラー作品なんぞ期待してないでしょ？ 筆者の過去の投稿したホラー作品見れば才能無い事くらい一目瞭然でしょ？ 文章力も表現力も無いでしょ？ ちつとも怖く無いでしょでしょ？

企画なんて祭りです。エロい人にはそれがわからんです。参加する事に意義がある。だから適当にやります。私ミラージユのいい加減ホラーにしばらくお付き合いして戴けると幸いにございます。

では早速、『恐怖』という感情は一体どこから来て、どの様に芽生えるのか？

先程述べたように、生まれて間もない赤ん坊には恐怖心というものがほとんどありません。しかし、成長するに至って自分の身に危険

を及ぼすものに恐怖を感じ、それに対して回避行動などを起こすようになります。

例えば、何かイタズラをしてそれを親に見つけた時、怒られるのを怖がりその場から逃げ出したり、刃物などの自分の身を傷つける物に触って痛い思いをすると、その痛みで恐怖を感じそれらを拒むようになったりします。

これらの行動により解明出来た一つの恐怖心の理由。

『恐怖』とは、『経験』。

人間のみならず全ての生物は自分が嫌な事や痛い事など強烈なストレスを感じた経験をする、それは学習という形で脳裏に深く記憶されて、『あれは怖いものだ』と認識するようになります。これが『恐怖』という感情の始まり、原点ではないでしょうか。

「あの人にはいつも悪さをされて自分を傷つける、だから関わりたくない、怖い」

「あの道は以前車で通った時に事故りそうになった、だから通りたくない、怖い」

「この手の心霊番組は前に見た時に寝れなくなってトイレにも行けなくなった、だから見たくない、怖い」

つまり『トラウマ』ってヤツです。以前に危険な目にあった、非常

に不快な思いをしたなどという経験がきっかけ、引き金となり、その人間に『恐怖』という感情を植えつけていく。二度と経験したくないという恐怖心。

こりや何も人間に限った事じゃないですね。犬だって猫だってイジメてくる対象物を見れば一目散に逃げ出しますし、爬虫類や虫だって天敵といわれる捕食生物と出会したら『蛇に睨まれたカエル』状態になってしまいます。

知ってしまったからこそ、学習してしまったからこそ『恐怖』。なるほど、生まれて間もない赤ん坊に恐怖心が備わっていない理由もこれで納得出来ます。人や他の生物それぞれに恐怖心を抱くものに対し違いがあったりするのも、そのそれぞれが経験した記憶に違いがあるからなのでしょう。

これは多分、どの生物においても共通する話ではないかと思います。降りかかってくる危険から身を守る為の心構え、『恐怖』とは生きていく上で学習すべき必要不可欠な感情なのかもしれません。

まあ色々考えてたらこんな答えに行き着きました。しかし、生物に『恐怖』という感情が芽生える理由はとりあえずそれで良いとしても、この説明だけではどうしても解明出来ない話があります。

虫だのカエルだの鳥だの猿などの人間より下等な生物が感じる『恐怖』とは別に、地球上の生物最高の知能を司る人間はそれ以外の事に対して恐れるものが存在します。

……もし、あなたが撮った写真やビデオに映るはずのない『何か』が映っていたとしたら？

……もし、あなたが無事生きて帰ってきた人がいないと言われている廃墟に迷い込んでしまったとしたら？

……もし、あなたが呪われる、祟りが起こると噂されている恐ろしい話を聞いてしまったとしたら？

……ところで今、あなたの真後ろにいるのは一体誰！？

ウラミハラサデオクベキカ！！

オマエモミチツレニシテヤル！！

なーんちつて、嘘です。

大半のホラーと言われるものの内容は大体こんなもの。やれ『一枚の心霊写真に写った人間が謎の変死をした』とか、やれ『呪いのビデオを見た人間は数日後に呪い殺される』などのオカルト系都市伝説や怪談話などなど。

でも実際ですよ、本当に心霊等に呪い殺された人間っているんですよか？ 不慮の死を遂げた女性の怪談話を聞いた人間が、その後、その女性の霊に同じ死に方をさせられるなどという都市伝説も良く目にしますが、本当にそうなった人って今まで何人いますか？そしてそれは、正式に死因として記録に残ってますか？

「今、あなたに呪いをかけました、あなたにはこの一週間の内に何かしら悪い事が起きるでしょう」

朝、忘れ物したら電車に乗り遅れて会社に遅刻しました。それにより仕事にも差し支えが出て会社に利益損害が出ました。そしたら会社クビになっちゃいました。

「俺は呪われてるうううううううう！！ 怖いよおおおおおお！！！」

んなあ訳がない。忘れ物しないように家を出る前にしっかり確認しとけば未然に防げた不幸。自業自得です。一週間の内に一つくらい悪い事があつたって何も不思議な話じゃありません。偶然もいいとことです。

決して執筆はオカルト完全否定派って訳ではありませんが、証拠や科学的根拠が無い限りそれらを証明するものが何一つ無いのは事実。逆に言えば、解明出来ないからこそ嘘でも本当でも言いたい放題って事です。

迷信、伝説、噂話など……、人間は存在が不確かなものに対しても『恐怖』を感じます。また、これから訪れる未来の出来事や予想される展開に対しても恐怖心を抱く事があります。

「僕は大学卒業したらちゃんと就職出来ているんだろうか？」

「2012年に地球が滅亡するってマジ！？」

「……初めてのHって、スッゴい痛いんでしょ……？」

これらの恐怖心は、先程の『経験から学んだ恐怖』とは全く真逆のもの。未確認、未経験であるから『嫌な目に合うかもしれない』という心配から生み出されるもう一つの『恐怖』。

『恐怖』とは、『未知』。

知らないからこそ何が起るかわからない。それが自分にとって良いものなのか悪いものなのか分別出来ない。だから身構える。体が竦む。念には念、期待よりも先に心配事が脳裏を駆け巡る。怖いと感じる。

ぶっちゃけ心霊という現象がはつきりと科学的に解明されれば、いざ大切な人が亡くなってしまったとしてもまた幽霊として会う事が出来る可能性がある訳だから、怖いという感情よりむしろ嬉しいという感情の方が先に湧き出すはず。

これから先に経験する出来事があらかじめバーチャル体験する事が出来れば初乗りのジェットコースターにビクビクする事も無いし、恋愛に対してももつと大らかな気持ちで堂々と挑めるはず。

でも、それは現在の人間が持つ技術で実現するのは不可能。だから心霊や呪い、祟り、都市伝説などが本当は実在していて自分の身に災いを呼び寄せるかもしれない、自分の目の前に現れて不幸にされてしまうかもしれないと思ひ込んでしまう。

そしてそれら未知のものは、自らの身と目を持って嘘か事実か、それが楽しいのか苦しいのか気持ちいいのか痛いのか体験する以外確

認の方法が無い。後悔するかもしれない、失敗するかもしれない、もしかすると取り返しがつかない事になるかもしれない。

だから怖い。『恐怖』を感じる。これは先の『経験』からによる恐怖』と深く連結していると筆者は思う。以前に『恐怖』を体験しているからこそ、未知のものにその記憶以上の『恐怖』に出会される、と考えてしまうのではないだろうか。

『未知』による予測のつかない状況に遭遇し、それまで受けてきた苦痛、後悔などの『経験』の記憶が脳裏に蘇った時、人間は恐怖心という感情が湧き出してくるのではないか。これが筆者が寂しい脳みそで思考した挙げ句に辿り着いた『恐怖』の正体。誰の心の中にも存在する、第五の感情。

何ですって？

言葉が足りない？

説明になってない？

全文支離滅裂？

ちっとも説得力が無い？

そりゃそうでしょう。先程も述べた通り、何せ私筆者の知能は凡人レベルです。別に心理学や精神論に精通してる訳でも何でもありません。タダの自問自答です。もっと詳しい心理学を調べたい人はどこの学者さんにでも聞いて下さいな。あつしには関わりの無え事でごさす。

でもね、一つだけかなり確証を持っている持論があるんですよ。

それは、全ての生物が一体何に対して一番の『恐怖』を感じるか、
って事。

ズバリ、『死』です。

生物は過去に危害を加えられた経験に対してそれを『恐怖』と感じ、
再び同じ危害を加えられる事、または未知なるものからそれ以上の
危害を加えられる事を怖がる。

ならば加えられたら一番怖ろしい危害とは何か？ それはやはり『
死』、殺される事です。弱肉強食の自然の世界で天敵に捕食される
のはもちろん、我々人間など知的動物が恰好で狩りを行う行為も対
象となる生物からすれば最大の『恐怖』。

全ての生物は遺伝子レベルで『生きている限りたくさんの子孫を残
さなければならぬ』という必須義務を負って生まれてきます。
なぜかは知りません。生まれてくるんです。そうなんです。余計な
突っ込みは不要です。

なので、それを絶命により阻止されようとするやと自然と徹底的に対
抗しようと行動を起こします。あるものはその脅威に自らの力で立
ち向かい、あるものは全精力をかけてその脅威から逃げます。

全ては『命を奪われるかもしれない』という最悪の危害から自らの
身を守る為、最大の『恐怖』から逃れる為に。

人間に限った話を見ると、突然他から命を奪われそうになれば誰もが間違いなく抵抗するでしょう。殺されるのに納得出来る理由が無ければそれは当然の事ですよね。隣りの家に無差別殺人鬼が住んでるなんて聞いたら普通は今すぐ引越したくなります。

しかし、その隣人がオモチャの刀で斬りつけてくるだけの幼稚園児のイタズラっ子ならば、多少カチンとくる人はいるかもしれませんが可愛らしいもんです。例えその幼児の心に、殺人鬼と同じくらいの殺意があったとしても。

危害が最小ならそれほど恐怖心を感じる事はありません。蚊とスズメバチどっちが怖いかと聞かれたら圧倒的にスズメバチでしょう。下手な場所を刺されたら死ぬ可能性はある訳ですから日本では常識です。

ところがあら不思議、これがマラリア病流行地だったりすると簡単に立場逆転です。これは我々日本人が蚊に殺傷能力が無いとこれまでの人生で経験しているからそう思うだけで、いざ死ぬ可能性があるるとわかればそれはとんでもない『恐怖』に変貌するのです。

人々がホラー小説や都市伝説などを怖がる理由もそう。

人間は人が死ぬ、殺される話に凄まじい恐怖心を抱くのです。例えばリアルな殺人事件のニュース、過去の戦争記録、そしてフィクションとはいえサスペンス小説、スプラッター映画……。もし自分が死んだ人間と同じ目にあつたらどうしよう、同じ立場に立たされたらどうしよう、とついつい感情移入してしまう。

以前、『リング』という映画が大ブームになりました。貞子、呪いのビデオってヤツですね。あの映画を観て『もしかしたら自分のと

ころにも七日後に貞子が来るかもしれない』という恐怖感を感じた人は結構いらつしやるでしょう。

しかし、これも『このビデオを見た者は七日後に死ぬ』ではなく、『このビデオを見た者は七日後にイボ痔になる』なら、あら不思議。デスクワークで座りっぱなしの人にはかなり辛い事になりますが、薬を中にチューッと注入すればスツーッとパツッでお尻感動です。ちつとも怖くない。

なぜなら、イボ痔で死ぬ人はまずいないからです。でも本当にイボ痔になると死に値するほど毎日地獄ですがね、経験談ですが。

人が死体を見て怖がる理由もそうです。『ここにいたら自分もこの人のようになるかもしれない』という警戒心から恐怖を感じる。これは人間以外の動物でも見られる光景で、実際に毎度カラスに荒らされるゴミ収集場にカラスの死体をぶら下げたら、一羽もその場所にはカラスが近寄らなくなったという話があります。

死後の世界がよくある言い伝え通り、天国やら楽園やら輪廻転生の世界があつて、それが確認されているならばそれほど『死』に対して恐怖心を抱く事もないでしょう。しかし、それを科学的に立証してくれるものは未だに存在しません。命は一つ、人生一回こつきり、それが常識的な見方でしょう。

皆様はこんな認識ありませんか？

自転車に乗るのは好き、でもバイクに乗るのは怖い。

プールで泳ぐのは好き、でも海や川で泳ぐのは怖い。

ピクニックは好き、でも雪山登りは怖い。

合コンは好き、でも出逢い系は怖い。

何ですか？ それは死ぬ、または殺される可能性が高い、とこれまでの人生経験や情報などで学習してるから。本当はそれほど大差無いんですけどね。自転車だって事故りや死ぬ事あるし、合コン殺人事件だってこれから先あるかもしれませんよ、その合コン好きのあなた。

『死』とは、『恐怖』のバロメーターであり、病死にしても殺害されるにしても今までに『経験』してきた辛い、痛い記憶よりも壮絶な思いをした末に待つ最悪の危害であり、またその後の魂の行方が何一つわかっていない『未知』の世界への入口でもある、『恐怖』という感情が生まれる理由を完璧に満たしたものの。

呪われる心霊現象が怖いんじゃない。

襲いかかってくる未確認生物が怖いんじゃない。

錯乱した殺人鬼が怖いんじゃない。

怖いのは、その先に待つ『死』。

つまり、結論。

一番怖いホラー小説を書きたいのならば、読者に『死の恐怖』をリアルに実感させられれば良い。

何だ、それなら簡単じゃないか。では最後に、この読むに耐えない下手くそな持論文でフェイクした、最高のホラー作品を皆様にご提供してこのお話を終わらせたいと思います。

これまで私、変人ミラージユのキチガイ妄想にお付き合い戴き感謝しております。お陰様であなたの居場所を通信端末により探知する事が出来ました。逃げても無駄です。私はもうあなたのすぐ隣にいます。

購読代としてあなたの命、戴いていきます。御利用ありがとうございます。

なんつってー、嘘でーす。

『恐怖』と人間

最大の『恐怖』、それは『死』。

これは人間のみならず全ての生物に共通する話。

だから、その『恐怖』から逃れる為に肉食動物に追われる草食動物は力の限りを尽くして逃亡する。例えば生まれ持った肉体構造の違いで走る速さに絶望感な差があったとしても、例えばこの世に産み落とされたばかりでまだ四肢がしっかりと地に立てる状態でなかったとしても。

しかし自然の世界は非常に厳しい、まだか弱い子供のインパラは地上最速のハンターであるチーターにロックオンされ、母から、群れからはぐれ一頭だけでその牙から逃れようと必死に草原を駆け回る。

逃げるインパラ。

追うチーター。

アフリカの大自然などを特集したテレビ番組で我々がよく見かける光景。

そしてついには悲しいかな、子供のインパラはチーターの鋭い爪に大腿を引き裂かれ、その場に力無く倒れ込む。

抵抗を止めるインパラ、そしてチーターはトドメとばかりインパラ

の首元を牙で食いちぎり、生きていく為の栄養を捕食により摂取する。

これがサバンナの掟、これまでの生物の命の連鎖を支えてきた弱肉強食の世界なのだ。

……つて、ちよつと待てーい！

毎度こんな場面を見る度、不思議に思う光景。あれほどまでに命を奪われる事を拒絶し全力で逃げ回っていたインパラが、たった一撃チーターの攻撃を受けたただけであっさりと抵抗を止めて潔く捕食される件。

逃げ回り続けて疲労困憊で諦めた？ 傷が致命傷と悟りこれ以上は抵抗しても無駄だと諦めた？

果たしてそうだろうか？ それまで何百メートルと思しき距離を全力で逃げ徹底的に捕まる事に抵抗してきたはずなのに、捕まった途端そう簡単に『死』という『恐怖』に対し覚悟を決められるものなのだろうか？ 例え、それが人間よりも知能の劣る下等動物だとしても。

それどころか、首元を噛まれ絶命寸前のインパラは苦痛に悶える仕草をちつとも見せずに、むしろウツトリと高揚感に満ちた瞳をして体全体も完全に脱力している。

まるで、『死』を迎える事に対し快感を得ているように。

『脳内麻薬』。

どうやらこれが捕食されるインパラの脳内で活発に働き、『死』への恐怖心や生きながら食われる激痛を緩和して安らかな最期を迎えさせているようなのだ。

「麻薬？ 何それ、って事はインパラは脳内に覚醒剤みたいなものを常に蓄えている訳？」

そうなんです。しかもこれ、インパラに限った事じゃございません。我々人間の脳内にも存在している物質なんです。これこそが、地球上に存在する生物全てが『恐怖』という感情に打ち勝つ為に備わった最終兵器。

『恐怖』とは、生命継続の危機的状況に対し脳より体全体に対応出来る準備信号を促す大切な感情の一つ。故に、感受するその精神的ストレスも並み大抵のものではない。

どの生物においても、安定していた精神面や身体が突然急激に不安定な状況におかれると不快感を促す神経伝達物質が脳に伝達されストレスを感じる。朝などの睡眠状態からの目覚めに強烈に機嫌悪くなるのは正にそれ。

しかし、脳内にはそれらストレスを解消させる為の神経伝達物質も同時に存在している。例えば感情を奮い立たせ興奮状態にする『ド

「パーミン」とか、逆に興奮状態を安らげ精神を安定させる「セロトニン」とか。

その中でも、医療面でも鎮痛剤として使われる「モルヒネ」の何十倍の効力があり、鎮痛能力と快感を与えるとされているのが通称「脳内麻薬」と呼ばれている伝達物質「エンドルフィン」なのだ。

「ランナーズ・ハイ」という言葉をご存知な人も多いだろう。マラソンランナーなどが長距離のランニングで疲労困憊となり肉体的には相当限界まで追い込まれているはずなのに、なぜか精神的には非常に高揚感を得て快樂すら感じる現象。

正にその状態こそが、肉体を傷つける行動により感じたストレスを解消させる為、脳内から大量にエンドルフィンが分泌されている状態。苦しいはずなのに気持ち良い、覚醒剤や大麻などの麻薬服用時と同じ感覚の一種のトランス状態なのだ。

ちなみに、この「エンドルフィン」は性行為においても分泌されると、言えばその快感の凄さがどれほどのものか簡単に理解して戴けるだろう。

ああ、なるほど。と一瞬で理解したそのあなた。お盛んですなあ、好きですなあ、このスケベ。このエッチスケッチワンタッチ。でもしょうがないよね、気持ち良いもんは気持ち良いもんね。たまないよね、やめられないよね、「脳内麻薬」、感謝感謝。

……話が脱線したので軌道修正させて戴きます。

この『脳内麻薬』が存在しているからこそ、生物は『死』という『恐怖』に対し対抗して存命し続けてられていると言っても過言ではない。『死』とは必ず全ての生物に訪れる現象。常に『死』のストレスに晒されながらも絶望せず日々の生活を過ごしていけるのは、『楽しい』、『気持ち良い』という感情を生み出してくれるこの物質あつてこそこの話。

そして、この『脳内麻薬』の効果により、最高の知能を司る我々人間だけが『恐怖』という感情に打ち勝つある術を手にしたのだ。

人間は、『恐怖』を娯楽に変える事が出来る唯一の生物。

どの生物もわざわざ自らの命を脅かすような行動を起こす事はまずしない。しかし、人間だけはあえて危機感を感じる事によって『脳内麻薬』の分泌を促し快楽を得ようとする。

例えばバンジージャンプやスカイダイビングといった、一歩間違えば自殺行為とも取れるアトラクションに喜びを感じ、『未知』の存在であり命を奪われるかもしれないと思しき心霊現象や殺意を題材とした小説や映画作品を鑑賞する。

まだ発育途中な子供でも同じような状況が見られる。皆様も経験あるだろう、鬼ごっこなどで鬼から追われている時、捕まる『恐怖』にその身が竦んでしまってもおかしくないのに楽しそうに何言ってるかわからない絶叫をあげて逃げ回ったりする。

「いやああああああ！ 怖iiiiiiiiiii！！」

などと絶叫しながらもその表情は笑顔。これこそ正に『脳内麻薬』が引き起こしている状態そのもの。他の野生生物よりも『死』の場面に会す可能性が少ないからこそ、『恐怖』により快感を得る事が出来ると解明する高度な知能があるからこそ、人間は『恐怖』を娯楽にする事が出来たのだ。

もちろん、この夏ホラー企画だつて『脳内麻薬』という物質があつたからこそ存在出来たものですね。実に脳の仕組みとは面白く出来てるもんです。夏の風物詩を提供してくれている『脳内麻薬』様にいやはや感謝感謝。

でも、ちよつと待った。

人間様よ、ちよいとばかりこの『脳内麻薬』を酷使し過ぎちゃいませんか？

これだけの快感を与えてくれる物質が脳内に存在しているというのに、人間はその刺激だけでは飽き足らず外部からも麻薬を服用する者や、あわや命を落とすスレスレの自殺行為のような暴走をしてまでスリル感を得ようとする者はあとを絶たない。

ある一定度の刺激に慣れてしまうと、人はさらに強い刺激を求めようとする。それを続ける事によって次第に脳は刺激に慢性化し、いつしか本当の『恐怖』すら感じなくなってしまうのではないだろうか？

実際、筆者である私がそうです。突然のカミングアウトになりますが、私ミラージュは数年前に生活のストレスにより鬱病を発症し、数回の自殺未遂を起こした過去があります。

自殺行為に対しても『脳内麻薬』は分泌されるそうで、私は自然とそれで日々の耐え難いストレスから逃れてきたみたいです。現在は投薬治療により自殺願望は無くなりましたが、それまでの行為により私の脳は様々な刺激に対しかなり鈍い反応しか示さなくなっていました。

『死』に対し、何の恐怖心も感じなくなってしまったのです。

いつ死んでもいい、例え突然背後から精神障害者に刃物で刺されようと、例え前方から暴走してきた車に跳ねられようと、例え原因不明の奇病に冒され余命宣告されようと、そんな事はどうでもいいと思えるようになってしまいました。

だから、自分がいずれ『死』を迎える事に何の躊躇いありません。しかし、一つだけ気がかりな事があります。

私は『死』を迎えるその瞬間、チーターに噛み殺されるインパラのような安らかな心境になる事が出来るのだろうか？ 果たしてその時、私の脳に『脳内麻薬』は分泌されるのだろうか？

そもそも、『脳内麻薬』を酷使用する我々人間は他の生物のような苦

しまずに済む最期を迎える事が出来たのだろうか？ 天敵を持たず、狩られる事も無く、地球上生物の頂点に立つ我々人間は実際の『死』の瞬間の『恐怖』に打ち勝つ事が出来るのだろうか？

人間は、『恐怖』を娯楽に変える事が出来る唯一の生物。

しかし、その代償として人間は最も苦痛に満ちた最期を迎えなければいけない生物なのかもしれない。

と、最近私は思っています。

人間の皆様、残念でした。

『脳内麻薬』の乱用には、くれぐれもご注意下さいませ。

フヒヒ。

『恐怖』の夢（後書き）

と、まあいまいち説得力の無いうんちくをダラダラと書かせて戴いた今回の夏ホラー企画。

もう最初から創作意欲が湧かなかったもんで、適当に狂犬病やら脳内麻薬やらキーワード選んで持論混ぜ込んでまとめただけのエッセイみたいになってしまいました。

本格的なオリジナル創作ホラー小説を期待してアクセスして下さいました読者の皆様、期待外れな作品ばかりで本当に申し訳ありませんでした。

まあどうせ、私ミラージユの作品つてところで期待して読んで下さっている方はほとんどいらっしやらないとは思いますが。

そこで、お詫びの口直しとしてはなんですが、最後に私自身が経験した、いや今も継続して経験しているちょっとした不思議なお話を一つ。

先程の作品の中で、私は『恐怖』を感じなくなってしまった、と書かせて戴きましたが、どうやらそれは現実の世界での話みたいのようです……。

私は、寝るのが得意ではありません。

なぜなら、時たまとても『恐怖』を感じる夢を見る事があるからです。

いや、見ると言うより、『見せられている』と言った方が正しいのかもしれない。

私自身が鬱病で精神的に心境が不安定で、薬を服用しないと寝つきが悪くまた眠りが浅いつてもそんな夢を見る原因でもあるのですが、それだけではどうも説明しにくい点が多々ありまして……。

自分が、誰かの中に入って夢の中の景色を見ているのです。

つまり、自分の目で見た目線ではなく、自分以外の人間が見た、あるいは見てきた景色を見せられている感覚。

その景色の中には、私自身が過去に見て記憶している光景なども様々含まれていて、最初はそれらの記憶が色々と折り重なって創られた世界を自分の頭の中で夢として見ているのだと思っていました。

しかし、何かどうも違う。夢に出てくる道や建物に見覚えがあっても、実際にそれを見て記憶した当時の私の年齢では決して見る事が出来ないはずの目線の角度からその景色を見ていたり、私自身がまだ生まれていないはずの日本の古い時代の街並みが夢の中に出てくるのです。

高速道路の高架の下に立ち、上空を見上げるとそこには高架とその下に走る電車の陸橋の間から覗く一件の雑居ビルと屋上に建てられた広告の看板。上手く状況を説明出来なくて申し訳ありません。とにかく、高さの違う高速道路と線路の間からビルを見ている景色だと思って下さい。

その高速道路、線路、雑居ビルは現在でも存在しているものなのですが、ビルの屋上にある広告看板は私がまだ幼稚園児くらいだった頃に建てられていたもの。当時、その看板を私が夢で見た目線の角度で眺める事は私はおろか一般人では絶対に不可能でした。

なぜなら、夢の中で私が立っていた場所はその頃まだ海だったからです。

現在こそその場所は二十一世紀に向けた新都市構想で大幅に埋め立て工場が行われ、普通に似たような景色を見る事が出来ます。しかし、私が幼い頃の当時は高速道路の高架の先は造船ドックが広がる港になっていて、そのドックの関係者以外には中に入る事が出来ないはずなのです。

私が夢で見た奇妙な景色はこれだけではありません。明らかにまだ私が生まれてきていない時代と思われる古い街並み、木製の一戸建て、アスファルト舗装されていない荒れた砂利道、そしてまるで第二次世界大戦中の資料に出てくるようなモンペや学生服を着た人々の姿。

それらはとても夢とは思えないほどリアルな光景で、なぜか不思議と懐かしさまで感じるものばかりでした。

と、言っても夢の中に出てくる景色なんて人の記憶や想像があれこれごちゃ混ぜになったものばかり。以前テレビで見た戦中のドキュメンタリー番組が影響してそんな夢を見たのかもしれない。所詮は夢。タダの記憶の集合体が作り出した想像の景色。

でも、私にはこれが見てきた景色や記憶ではない、という直感に近い確信がありました。これは私が良く知るある人物の経験してきた記憶の景色を見せられていると……。

この景色は、祖父の記憶。

祖父はその埋め立てられる前の造船ドックに勤めていました。なので、私が夢で見たその景色は祖父からすれば通勤帰宅時に工場出入り口を通れば毎日見る事になる光景。むしろ、私にこの景色を見れる知り合いは祖父以外存在しません。祖父以外有り得ないのです。

そんなバカな、下らない、と茶化す人もいらっしやるでしょう。でも、どうやら私と祖父には他人からでは理解出来ないような奇妙な縁があるみたいなのです。母や父を通り越し、まるで全く同じ遺伝子を受け継いだような錯覚さえ感じる同調感が……。

私のこれまでの人生は、常に祖父と深い関わりがありました。祖父自身はすでに私が中学生の頃に老衰で他界したのですが、無口で働き者で、一本太い筋が通ったような頑固一徹なその生き様は私の憧

れとなり、死後も私の生き方に強い影響力を与え、まるで導かれるように私は祖父のような人間へと成長していきました。

社会に出て就職し仕事をしている出先でも、様々な場所で祖父の面影を感じる事がありました。ここは以前、祖父と一緒に来た事のある場所。ここは以前、祖父から聞いた事のある場所。祖父が以前に関わった事のある場所。などなど。

その極めつけがこれ。祖父が定年まで勤めた造船ドッグ跡の埋め立て地は今や超高層ビルが建ち並ぶ近代都市となりましたが、奇しくも私がその数十年後にその地域で仕事する事になったのはやはり必然的な運命だったのでしょうか。

家族、親族全員が認めるお祖父ちゃん子だったという私ですが、祖父自身が非常に無口で出不精だったという事もあり、どこかへ一緒に出かけたとか遊んだという記憶はほとんどありません。しかも怒ると怖い人で、私は祖父を怒らせないよう常にビクビクして顔色を伺っていました。

でも、私は祖父が大好きでした。祖母と父方の祖父が亡くなった時はあまり悲しみを感じなかった私も、祖父の死の時は悲しみのあまり学校に通学している間も人目はばからず号泣したのを良く覚えています。何か、大切なものを失ってしまったような空虚感すらありました。

それ以外にも、私と祖父の関係が妙なくらい深かった事を証明する出来事が色々あります。これは母からの情報ですが、晩年祖父は痴呆症になり祖母や自分の娘の顔すらわからなくなるほどこれまでの記憶を失ってしまったのですが、なぜか私の名前と顔だけは最期まで鮮明に覚えてくれていたそうです。

また、自称『たまに幽霊が見える』と言う妹は、私がベッドで熟睡している時、足元に祖父が立っていたのを見たそうです。妹は看護婦をしています、よくナースステーションにお別れを知らせにくる患者さんの霊を見る事があるらしいので、その霊感は多分本物なのでしょう。残念ながら私には何の霊感もありませんけどね。

そんな話もあり、私は普段から祖父が見守ってくれている、と実感するようになりました。最も似ていて、身近に感じる血縁者。だからこそ、私はあの夢の景色が祖父の記憶だとすぐに悟る事が出来ました。祖父が何か私に伝えようとしている、何かを訴えようとしている、と。

しかし、今の私にはそれが何なのか全然わからないのです。それどころか、妹に祖父の霊がいた、と言われても怖いどころか喜びに近い安堵感を得た私が、その夢を見る度『恐怖』のあまり飛び起き、体中に寝汗をかいて全身の筋肉が凝り固まっているのです。

祖父が見せる記憶の夢、それは私と共通する景色のものもあれば、まだ学生時代の母や養女として貰われた母の義姉である叔母らしき女性の姿が現れるものもありました。それらの夢は何ともないので、私が『恐怖』を感じるのはいつも、ある建物の中にいる身の毛のよだつ気味の悪い光景の夢。

鼻から脳にまで突き刺さるような不愉快な薬品の臭い。

触るとヤニのようにベタつく茶色く汚れた建物内の壁。

まるで病院の佇まいのその建物は内部の人間の逃亡や部外者の侵入を防ぐように重い鉄門で隔離され、中にいる人々の姿は皆、常軌を逸していた。

頭に手術の傷跡があり、奇声を上げながら不自然な動きで廊下と走り回る丸坊主の子供達。

診察室らしき部屋で、不気味にほくそ笑みながらその子供達に何かの薬を注射する医学者のような人物。

建物の外の水壕のような場所に澱んだ緑色の薬品らしき液体を貯め、そこに飛び込み行水をする初老の白衣の男。

恐怖心と共に襲いかかってくる強烈な嫌悪感と絶望感。これは夢を見ている私の感情だけではなく、この夢を見せている人物、つまり祖父の感情も一緒に私の心の中に流れ込んできている感覚でした。

……これは一体、何？　ここは一体、どこなのか……？

戦時中は、日本軍による様々な医療、実験施設があったと噂されています。中には戦争に勝利する為、人道を外れた行為が行われていたとも言われています。まさか祖父は、それらの施設の一関係者だったのでしょうか？　私が夢で見ている景色は、その当時の祖父の記憶が写ったものなのでしょうか？

しかし、私にはもうその真相を知りうる術は一つも残っていません。

祖父は祖母と知り合う前、ある村に生まれ幼少期を育ち、その後上京して別の女性と所帯を持ち二人の間には男児が一人いたそうです。また、故郷以外にもたくさんのお親族が存在していたらしいです。

だが、それは全て無くなってしまいました。戦中の空襲で家も家族も親族も家系図も何もかもが焼失し、一人生き残った祖父は戦後に祖母とお見合い結婚をしてその後母が生まれました。

これが、これだけが祖母と母、叔母が知る過去の祖父の情報。元々本人が多くを語らない性格だったという事もあります。当時どんな仕事をしていたのか、どんな生活をしていたのか、前妻と息子に先立たれた後、一体どうやって生きてきたのか何もわからない、何の記録も残っていないのです。

母曰わく、過去の話の聞きかじりとすると祖父は機嫌は悪くなり口を真一文字に結んで黙り込み、しつこく問い質すと激昂して怒鳴りつけられたそうです。叔母も同様だったそうで、もしかしたら唯一話を聞けたかもしれない祖母も二年前に祖父の元へと旅立ちました。

もし、祖父が現在も健在ならば、その年齢はすでに百十歳を軽く越している事になります。祖父と同じ時代を生き、共に行動していた人物はまず間違いなく全員お亡くなりになっているでしょう。つまり、もう若かれし頃の祖父を知る者は誰一人存在していないと思われず。

そんな謎だらけの祖父が私に見せる謎の記憶、奇妙な光景。

祖父よ、貴方は一体、私に何を伝えようとしているのですか？

一体、私をどこに導こうとしているのですか？

そして一体、貴方は何をしていた、何者だったのですか？

所詮は夢の中の話、もしかするとこの夢は私が鬱病治療の為に服用している抗鬱剤が見せているだけのタダのキチガエ妄想かもしれない。

だが、私は日々を過ごし歳を重ねていく度、徐々に祖父の歩んできた道に近づいていくような気がしてならないのです。歩み続けていくこの人生の道の先に、祖父の姿があるような気がしてならないのです。

まだ命を絶つてはならないと。

まだやるべき事が残っていると。

どんなに辛くても、生き続けなければならないと。

それが果たして、私や周囲の人達にとって、幸になるのか不幸になるのか今では何もわかりませんが……。

最後に。

このお話はフィクションではありません。

実際に、私の身に起こっている本当のお話です。

最後まで読んで戴きありがとうございました。

くれぐれもトイレに行くのが怖くならない程度に、怖く真夏の夜の一時を楽しんで下さいませませ。

でわでわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6786h/>

夏ホラー2009今年も性懲りもなくあれこれ

2010年10月8日23時42分発行